

謎の月夜茸（つきよたけ）

根田 仁

ツキヨタケは、今昔物語にも登場し、古くから、「毒きのこ」、「発光きのこ」として有名である。学名は、紆余曲折を経て¹⁾、現在 *Omphalotus japonicus* (Kawam.) Kirchm. & O. K. Mill. とされている。ツキヨタケはブナの枯木に生えるヒラタケ形のきのこであり、現在、他に類似の種はないことに異論を唱える者はおらず、私もそう思ってきた。しかし、ここ数ヶ月、「日本産のツキヨタケは1種だったのだろうか？」という疑問に取り憑かれている。

私がそう思うようになったのは、江戸時代の「梅園菌譜」（天保7年・1836年）を見てからだ²⁾。この菌類図譜は、江戸の旗本の毛利元寿（号「梅園」）が作成した動植物の図譜の中の1つである（国立国会図書館デジタルコレクションで閲覧可能）。江戸時代の菌類図譜に掲載された図は、巧拙さまざまであるが、たいていは図から種名が同定できるような代物ではなく、当たらずとも遠からずの物が多い。また、他の図譜からコピペした物



図1. 毛利元寿「梅園菌譜」より月夜茸（国立国会図書館蔵）

もあり、実物からかけはなれている姿に描かれている物もある。しかし、この「梅園菌譜」は違う。掲載された図は、著者が実物を見てスケッチした物で、鮮やかに彩色されており、しかも、かなりうまい。さらに、採集地と採集年月日が記されている。これだけで資料的価値がかなり高い。惜しむらくは寸法が記されていないことだが、他の図譜の貧弱な情報と比べると、格段の差がある。

その「梅園菌譜」の中に、「月夜茸」と名前のつけられた図が2つある。最初の方の図では、ろうと状の茶色の傘、黄色のひだ、しっかりした柄があり、4本が株状に生えている(図1)。ナラタケ、オオワライタケ、フウセンタケなど似たきのこが思い浮かぶが、どれも違う。図に添えられた解説を現代語訳すると、「ある者が言うには、この物は光沢が滑らかで月のようにみずから光る。それゆえに名付けた。私が考えるには、月夜タケには、別の一種がある。形は大いに異なり、(図譜の)後で出てくる。月夜タケには二種あるのだ。天保6年閏7月26日(1835年9月18日)に白山で採取し、真写(写生)した。」(採集地の白山は、現在の東京都文京区白山)

梅園菌譜には、もう1枚、月夜茸の図がある。こちらはベニタケ属と同定できる形で、傘の表面には緑色のまだら模様がある。アイタケに似るが、模様が違う(図2)。この図の解説では、坂本浩然「菌譜」(天保6年、1835年)³⁾からの引用の後に「元寿が天保8年8月29日(1837年9月28日)に武江板橋根村(現東京都板橋区双葉町)の山中でこの採集をし、1里ほど、変わったものを探していたところ、平らな山の茅草や小笹の中にこれを得た。案内者である百姓の松五郎の下僕にこれを尋ねたが知らなかった。山から帰った後、松五郎の家に行き、名前を尋ねたところ、地元の者が「このきのこは毒きのこで、



図2. 毛利元寿「梅園菌譜」より月夜茸(国立国会図書館蔵)

食べる者はいない。名前は「光リタケ」という」と語った。私が考えるには、夜に光るために「光リタケ」というのは、月夜茸の方言で、この月夜茸に違いない。水に浸してみたら、水が青緑色になった。大毒菌である。(後略)」と記されている。水に浸したら水が青緑色になったということは、傘の表面に *Penicillium* か *Trichoderma* などのカビが生えているように見える。

梅園菌譜の月夜茸は、いずれも著者が発光を確認したことを記述していない(していないとも書かれていない)ので、発光菌かどうか確証はない。また、現在、私達がツキヨタケと呼んでいる種とは、まったく違う。それでは、このきのこは、いったい何なのだろう。後者は、カビの生えたベニタケ属だろう。問題は前者だ。この図譜の中では、土壌から生える「地茸類」に置かれているが、埋もれた木や付近の枯木から生えている場合もあるから、木材腐朽菌の可能性もないわけではない。

実は、この月夜茸にととてもよく似た種がある。それは欧米に分布する *Omphalotus olearius* だ。色、形がそっくりであり、しかも、発光菌・毒菌としても知られている(図3)⁴⁾。

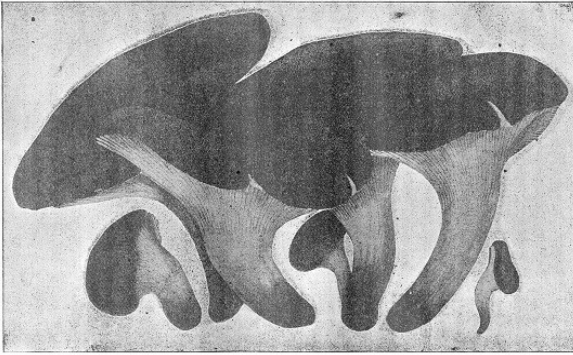


図3. *Omphalotus olearius* (DC.) Singer (Fabre 1909)

このきのこは、近年の研究で、日本のツキヨタケに近縁であることが判明した。欧米の種が日本にも分布することは普通でもあるから、この種が日本にも分布していた可能性がある。これまでの私は、江戸時代の菌譜の月夜蕈には立派な柄がついている(図4)ことに首をかしげ、ツキヨタケはヒラタケ形で

柄はほとんどないから、この図は間違いだろう。いいかげんに想像や伝聞をもとに描いているのでは?と、一笑に付していた。しかし、梅園菌譜を見てからは、立派な柄のある月夜蕈 (*O. olearius* または近縁種) の存在を疑うようになった。

現在知られていないだけで、100年以上昔なら *O. olearius* の採集例はあるかもしれない。そう思って文献を渉猟していたら、その可能性のある情報にたどり着いた。明治から昭和にかけて活躍した菌学者の白井光太郎は、ドイツに留学した時に Hennings に日本産のきのこの図譜⁵⁾ を見せ、鑑定してもらった。そして、その結果は Hennings によって1900年に報告された⁶⁾。何と、その中に *Pleurotus olearius* (= *Omphalotus olearius*) があつたのである。もしかしたら、白井は *O. olearius* を採集していたのかもしれない。



図4. 坂本浩然「菌譜」(国立国会図書館蔵)

その白井の図譜は、国立国会図書館に残されていた(図5右)。この図は白井自身が描いたものではなく、信陽菌譜から写したものであり、かなり稚拙なものだが、解説から現在のツキヨタケであることがわかる。残念だが、*Omphalotus olearius* ではない。

精密に正確に描かれていたなら、*Pl. olearius* ではなく、その近縁の新種としていたかもしれない。

一方、この図を鑑定した Hennings のメモ(図5左)には「*Pleurotus Af olearius*」と記され、Hennings が「*Pl. olearius* の近縁種」と認めたことがわかる。Hennings は、白井の説明を聞き、この結論に達したのだろう。この見解は正しい。ところが、報告では「*Pl. olearius* DC. Fl. Franc. VI. p. 44. Nom. Jap. Tsukiyotake. Nikko.」となっている(図6)。図が稚拙なので、「*Pl. olearius* の近縁種だ」と思うけど、*Pl. olearius* といえないこともない」と判断したのだろうか。もしも、図が

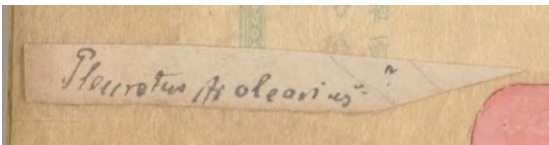


図5. 白井光太郎「菌蕈譜図」(国立国会図書館蔵)

Fleischige Pilze aus Japan.

Von P. Hennings.

Nachstehend verzeichnete Pilze wurden nach colorirten Abbildungen, die Herr Dr. Shirai nach lebenden Exemplaren an Ort und Stelle angefertigt hat, von mir bestimmt. Herr Dr. Shirai hatte die Freundlichkeit, die japanischen Namen diesem Verzeichniss beizufügen. Dasselbe dürfte ein nicht unwesentlicher Beitrag der im Gebiete vorkommenden, meist mit europäischen Arten völlig übereinstimmenden Pilze sein.

Pleurotus ostreatus (Jacq.) Sacc. Syll. VI. p. 355.

Nom. Jap. Hiratake. Tokio.

Pl. olearius DC. Fl. Franc. VI. p. 44.

Nom. Jap. Tsukiyotake. Nikko.

Tricholoma bicolor (Pers.) P. Henn. = *Tr. personatema* (Fr.).

Nom. Jap. Murakishimeji. Tokio.

図6. Hennings の日本産きのこの報告 (Hennings 1900)

現在、数え切れないくらいの種類のきのこが地球上に存在するが、ニホンオオカミのように過去に存在したが絶滅した種もあるだろう。また、森林の減少や環境の変化で、これから絶滅していく種も少なくないだろう。環境省や各県がとりまとめたレッドデータブックには、絶滅種として掲載されているきのこもあるが、目立たない種、人の関心をひかない種、近縁種と混同されている種、発生が稀少な種もあるので、絶滅種とされた種は本当に絶滅したかどうか？信憑性が乏しい。

梅園の「月夜茸」は、その後の確認がされていない。絶滅したのだろうか？それとも、この図はオオワライタケやナラタケモドキなどの形態の似ている種を描いたものなのだろうか？私は、梅園が「月夜茸」の名前で

掲載した1枚目の図のきのこは、その発光を確認したからだと思いたい。動植物の見事な図譜を残した彼が、新鮮な「月夜茸」を採集したのにもかかわらず、発光を確認することを怠ったとは思えないからだ。この「月夜茸」の子孫が、今でも秋になると日本のどこかで光っていることを願っている。

引用文献

- 1) 根田仁(2014)きのこミュージアム. 八坂書房
- 2) 毛利元寿(1836)梅園菌譜. 国立国会図書館蔵
- 3) 坂本浩然(1835)菌譜. 国立国会図書館蔵
- 4) Fabre J-H. (1909) Souvenirs entomologiques. 10th series.
- 5) 白井光太郎(1931)菌茸譜図. 国立国会図書館蔵
- 6) Hennings, P. (1900) Fleischige Pilze aus Japan. Hedwigia 39:155-157.



【図書紹介】 驚きの菌ワールド 菌類の知られざる世界

編者：日本菌学会、発行所：東海大学出版部、2017年2月28日発行、92頁、ISBN：978-4-486-02136-0、2000円（+税）

きのこ、カビ、酵母、粘菌などの生態と、地球生態系のなかで菌類の果たしている役割を、美しい写真と図版でつづる写真集。菌類の魅力や摩訶不思議な世界を、日本菌学会会員の多数の執筆者が解説する。



目次（抜粋） ◆水と戯れる菌類：水生不完全菌類◆黒い壁で陣地を守れ：偽菌核プレートの話◆ワムシの捕食菌と寄生菌◆あるときは線虫捕食菌◆そしてまたある時は…◆海に漂う海生菌の胞子◆クワガタの便乗ダニ「クワガタナカセ」を泣かせる？◆菌糞に生える芸達者はカビ・ヒゲカビ◆ウシグソヒトヨタケ柄細胞伸長時のセプチン繊維◆植物と共生するアーバスキュラー菌根菌◆大豆さび病菌の3食付マンション◆スエヒロタケが起こす病気◆きのこを食べて、きのこのマネをする植物◆ランの多様性を育む菌類◆モグラ類の便所から発生するきのこ◆動物のフンの上で生きる菌類◆外生菌根◆日本を代表するカビ・コウジカビ◆陸から海へ、進化途上の海のきのこ◆他人のそら似◆きのこも化石になる!? ◆包み込まれて潜っていったトリュフ類◆カビの胞子をスケッチする◆水中を泳ぐカビ「ツボカビ」◆世界のウドンコカビ◆クロイボタケ：ビックリ箱から飛び出します◆きのこの顕微鏡下の姿◆変色するきのこ（イグチ科）◆ドセイカタホコリ *Didymium saturnus*：外より中がスゴい変形菌◆コロニーもいろいろ、胞子を生む方法もいろいろ◆ヒゲとまつげを持つカビ シュードラクネラ *Pseudolachnella*◆サルノコシカケはなぜ硬い？◆冬虫夏草類のミクロの形態◆微笑菌の宝石 多様な色と形を持つアカツブタケの仲間◆担子菌類の胞子のいろいろ◆細胞質をわけける工夫：菌糸隔壁◆光るきのこの「なぜ」◆きのこの持つジグソーパズル◆不整子囊菌類の子嚢果、子嚢胞子◆水辺で戯れる菌類：半水生不完全菌類